

はくあい

Aug. 1996

社会福祉法人
京都博愛会

故 富田 仁 前理事長 追悼特集号



病院葬当日の天性寺山門前

社会福祉法人 京都博愛会

京都博愛会病院

〒603 京都市北区上賀茂ケン山1

TEL075(781)1131

富田病院

〒603 京都市北区小山下内河原町56

TEL075(491)3241

訪問看護
ステーション **はくあい**

〒603 京都市北区上賀茂深泥池

TEL075(781)2711

追悼特集号に寄せて

社会福祉法人
京都博愛会

理事長

天野 博道

故富田仁先生の突然のご逝去から早くも六カ月経ちましたが、今でもあの温厚なゆつたりとした足どりの先生が何処からともなく出てこれれそうな気がしてなりません。しかしその反面、理事長の重責を引継いだ身として、厳しい病院経営の重圧の中に改めてご逝去による穴の大きさとその存在の偉大さを痛感し、掛け替えのない方を失ったことの実感が身に滲みこの頃でもあります。

私は約六年前、京都博愛会の経営管理面での先生の補佐役として理事を委嘱され、先生のご負担軽減に努めてきましたが、先生には

昨年暮頃から心身のご衰弱が目立つようになり、周囲の者に特段の気配りをするよう注意しておりました。しかしご自身は別に何ともないと言われて、直前まで従来通りの過密な診療をこなされると共に私病協、学校などの院外活動にも万全に対処されていきました。

そして二月十七日突然倒れられご自身何のお苦しみもなく、また皆に何らの迷惑をかけることなく他界された次第で、先生の誠に偉大な生きざまと同様に余人には真似し難いご立派な死にざまと申し上げるほかありません。

先生の五十余年に亘る医学者或いは医師として又、教育者としてのご功績につきましては、本号に掲載させて頂きました諸先生の弔辞の中に詳しく紹介されていますので省略致しますが、予期しない急逝にも拘わらず、翌日のお通夜

と翌々日の密葬には寒風の中を多数の方のご弔問を頂きました。

また、三月十六日の病院葬では、岡本先生に葬儀委員長をお引き受け頂き、京大総長井村先生を始めとした多くの方から心のこもった弔辞を頂くと同時に約千名の方々のご会葬を賜りましたことに対しまして改めて御礼申し上げますと同時にこれらは何よりも故人の徳のなせるものと存じる次第です。

富田仁先生のご逝去に伴い、理事長、両病院院長共に新任致し、既に就任のご挨拶を申し上げておりますが、故人が余りも偉大な存在でありましただけに、微力非才の身に重すぎる責務がございますが、故人の偉業を汚すことのないよう全力を尽くして専心努力致しますので、前任者同様、格別の御指導御支援を賜りますようお願い申し上げます。



京都博愛会病院

院長 黒河内 剛

前理事長兼京都博愛会病院院長富田仁先生が急逝されたのは、二月十七日のことでした。一週間程前から体調を崩され静養されておられました。回復に向かわれて十九日から出勤されるとお聞きした矢先の出来事で、ご危篤との連絡を受け富田病院に向かった時は、半信半疑でありました。

近年体調が優れないようにお見受け致しておりましたが、先生は病める人々と病院の為に身を挺して頑張っておられたようです。

俳人 日野草城が明日をも知れぬ重症の床にありながら、俳句及び俳句誌「青玄」の為に一命を賭している、そのきびしさに応じて気候までが凜然と冴え返ってくるとの意を込めて吟じた、「衰へしいのちを張れば冴え返る」の心境を、故富田仁先生の晩年のお姿に垣間見ることができるような思いが致しております。

予期せぬ事態に遭遇し、心の準備

もできぬままに、その器ではない

ことも承知の上で、院長就任を受諾し、五カ月余が経過しました。日が経つにつれ、前院長の偉大さと比べるべくもない自分の小ささに今更のように院長に就任したことを後悔している毎日です。

医療をめぐる状況はあらゆる面で年々厳しさを増して来ており、一瞬たりとも手綱を緩める事は許されない状況下にあることを考えるとき、後悔ばかりではおれませんで、浅学非才の身ではあります。地域の皆様方、関係機関の皆様方、全職員のご指導、ご協力を賜り、故富田仁先生が我々に残された「博愛・協調・健康」の京都博愛会の理念を大切に、地域医療・包括医療に全力投球し、病める人々の心身を癒す拠り所として十分に機能する病院を目指し、職員共々その叡智を結集し奮闘したいと思っております。

故富田仁先生の偉大なる足跡を汚すこと無く、京都博愛会病院のさらなる発展に尽力する決意をもって、院長就任の挨拶とさせていただきます。

富田仁先生の急逝は誰もが、先生ご自身をも含めて、予期せぬものでした。あの忘れもしない二月十七日の午後富田哲也先生から突然の電話が入り何か異常な事態を感じましたが、詳細が把握できず私たちが富田先生宅に駆けつける

富田病院

院長 山本 仁

と、先生は既に心肺停止状態に陥っておられました。直ちに病院にお移しし、懸命の蘇生の努力がなされましたが、ご回復されることは遂にありませんでした。

先生に私が最初にお近づきできましたのは、二十五年前、中央検査部助教であられた富田先生が主宰される生化学自動計測結果の検討会を聴講した折でした。十二項目のデータのみから臨床診断を下すという勉強会で、先生は神業のような洞察と分析力を示されておられました。

私が富田病院の病棟で頻用していた書物は、富田先生と内田耕太郎先生編著の検査診断マニュアル

です。診療で困難な問題に遭遇し、この本で解決が得られない時は、先生にお手紙を書いてお知恵を拝借していました。いつも折り返しの確な示唆を戴きました。

五月十七日付けで内田耕太郎院長が名誉院長常勤顧問となられ、その後私が引き継ぐことになりました。大変な時期に重責を担うことになり、自分の能力体力を考えますと、不安でなりません。それにも関わらず、先生がいられます。しかし病気の患者さんは次々来られますし、直面する医療情勢は厳しさを増しており、一刻の遅滞もゆるされません。残された病院職員は協力してこの難局を乗り越えねばなりません。幸い経営にお詳しい天野博道新理事長のもとで、内田耕太郎先生には引き続きご指導戴けますし、若く使命感に満ちた富田哲也先生が副院長に昇任され、将来に向けて新しい息吹も芽生えています。私はとにかく誠心誠意最大限の努力をする所存です。皆様何卒宜しくお願い致します。



葬儀委員長
岡本道雄
(京都大学元総長)

告別の辞

今日ここ天性寺において、社会福祉法人京都博愛会理事長・京都博愛会病院院長富田仁君の葬儀が執り行われるにあたりまして、つしんでご霊前に告別の辞を捧げます。

富田君は大正十年三月鳥取県で生まれ昭和二十年九月京都大学医学部を卒業され医学部大学院特別研究生として採用され内科学第三講座真下俊一教授の門下生となられました。その後昭和二十六年六月に真下先生の後任の前川孫二郎教授の内科学第三講座に助手として勤務さ

れ、昭和三十三年六月京都大学医学部助教授に任命され、附属病院中央検査部に副部长として勤務されました。

昭和四十五年九月から一年間、アメリカ合衆国オレゴン医科大学臨床病理学教室に留学されました。この間免疫抗体の研究から血清蛋白や臓器組織蛋白の分析を積極的に行われ、今でいう「抗体」にあたるアレルギー抗体を発見しておられます。京都大学に帰られてからは、新しく発足した中央検査部において現業部門の基礎を堅め、多項目自動化的の今日に備えられました。またコレステロールの分析、脂肪負荷試験など、先駆的な研究を行

われております。

また昭和三十二年五月には富田精博士の強いご懇望のもとに旧姓荒木から富田に改姓されました。

学会活動としては日本臨床病理学会副会長、日本臨床病理同学院理事、日本アレルギー学会、日本循環器学会、日本化学療法学会、電気泳動学会、日本内科学会などの評議員や第四回「Quality Control」の会長ほか各種学会の総会長を歴任されまして、文部省、厚生省の委員を委嘱され、多くの表彰状或いは感謝状を贈られております。

昭和五十二年四月京都大学医療技術短期大学教授、昭和五十五年四月同主事を併任されました。

かねてから私は富田君の温厚篤実なご性格を尊敬申し上げてまいりましたが、直接にご高誼をうるにいたりましたのは、私が京都大学総長として医療技術短期大学学長をつとめました昭和五十年四月から五十四年十

二月までの間であります。富田君は創立間もない短大の発展につくされ、理学療法・作業療法学科の増設、また広報の発行、紀要の創設など短大の基礎を築かれ、今日隆盛な短大の生みの親として忘れてはならない方であり、また学生に対する教育においては、その全人格そのものが医療人としての道を示されるものであり、多くの優秀な医療従事者に大切な精神面を、わかりやすい身近な例をあげて、懇切に説き諭しておられましたことが思い出されます。惜しまれて昭和五十七年六月に退官されました。

その後、京都における名門、社会福祉法人京都博愛会理事長・京都博愛会病院院長に就任され、ご逝去まで十二年八カ月、法人の運営、病院の経営に努力されました。生涯現役という言葉のように、外来、入院の患者さんに対して、臨床医として患者さんの信頼を得ておられました。病院外にあつては、京都私立病院協会副会長、京都保健衛生

専門学校長をつとめられて、私立病院の発展並びに看護婦・臨床検査技師の教育にも尽力されました。本年二月初めより感冒気味で、十日頃より全身の倦怠感が強まりましたが、なかなか休もうとされなかつたところを、やつと説得されて自宅で休養されていきました。二月十七日昼、突然重篤な上部消化管出血を併発されまして、富田病院における救急処置の甲斐もなく、ついに同日十四時五十七分に永眠されました。

御年七十四歳でありまして、私からみますと尚お若くこれからの尚長く多くの人々を救い、京都の医療のリーダーの一人として親しまれるべき方でありました。そのご逝去は誠に惜しまれ、ご家族の皆様を始め多くの患者さんの悲しみを思いますと誠に痛恨に堪えません。

本当に人間の生とは、はかないものであります。しかし私は信仰がございますので、死後の世界や死後の魂といったものには確信をもっておりません。

私共が日常死について考えますときは、たとえられますように、一生というものは本当に滝壺に向かつて流れる水のようなものでありまして、「この世で考える死」「滝壺に落ちる死の瞬間」そして「死後の世界」の三つであります。私には死後の世界は、なお虚無のように思われるのであります。しかしながら、生きておりますときに、私共が心を持っていましたことは確かでございますし、多くの人に語りかけておつたことも確かであります。こう考えますと、貴方が誠意をもつて治療に当たられました多くの患者さんや、医療従事者の方々には必ずや貴方の崇高なお心を自らの心として、貴方が亡くなられた後も末長く生きられることでありましよう。これ

がはかない人生というものの人間の永遠に生きる道でもありませんか。

富田君、何卒安らかに眠り下さい。

平成八年三月十六日



京都大学総長
井村裕夫

追悼の辞

京都大学並びに京都大学医療技術短期大学部を代表し、故社会福祉法人京都博愛会理事長、京都博愛会病院院長、京都大学医療技術短期大学部名誉教授、富田仁先生の御霊前に謹んで追悼の詞を捧げます。

富田先生は昭和二十年に京都大学医学部を御卒業になった後、大学院生として内科学第三講座真下俊一教授、次いで前川孫二郎教授の御薫陶をお受けになりました。昭和二十六年には内科第三講座助手、昭和三十三年医学部附属病院検査部助教授を経

て、昭和五十二年に京都大学医療技術短期大学教授に御就任され、昭和五十七年六月に御都合により辞職されました。この間、三十一年間を教官として京都大学に在籍され、研究・教育・診療の各方面で多大な御功績を残されました。

ここで、富田先生が京都大学に御在職中に活躍されました足跡を振り返ってみたいと思えます。富田先生は京都大学時代を御自身が三つの時期に区分しておられます。

それに従いますと、第一は第三内科の時期で、先生は研究の時代と呼んでおられます。臓器組織抗原と血清蛋白の分析など

の御研究に邁進され、幾多の輝かしい研究成果を発表されました。例えばアレルギー発症機序の御研究では、アレルギー抗体（今でいうIgE）の証明、また心筋フォスファチド抗体の解析より自己免疫的心筋炎の証明などがあげられます。これら、当時の先生の御研究の成果は今日の臨床免疫学の基礎となる重要なもので、先生の研究者としてのすぐれた資質を示すものと言えましょう。

京都大学における第二の時期は副部長として、検査部の管理・運営に精をつくされた時代です。先生は診療サービスの時期とおっしゃっています。昭和三十三年に附属病院に検査部が開設されたのを機に、助教に就任され、検査部の実質的責任者として、実践躬行の精神で創設時の検査業務を確立されると共に、約二十年間にわたり、検査部の充実・発展に寄与されました。

当時の検査部はサービス部門との理由で、自由に研究することが禁じられており、先生には

その事を往々嘆いておられました。そのような制約がなければ、第三内科時代に築かれた先生の御研究の成果はさらに大きく発展したことと思いますと、誠に残念でなりません。それでも先生は、毎日毎日提出されます莫大な量の検査データを一つ一つ丹念にチェックされ、それを基盤にして、検査データの診断的価値、言わばその読み方を研究されました。この方面の名声を高めたのは、昭和三十七年より開始されました京大CPCでの先生の御活躍ぶりでした。先生は、CPCの症例の山積する膨大な量の検査データを整理と分析され、その中から、意義のあるものを選別して、誠实的確な診断を下されました。その検査データの読みの深さは参加者に等しく強い感銘を与えたことを、今でも印象深く、鮮明に思い出すことができます。

臨床検査医学の面での御研鑽の成果は、斯界のバイオニアのお一人として対外的に広い御活躍の場をもたらしました。即ち、

情味の深いお人柄は、人々の厚い信頼を集めてこられました。また、ユーモアにも長け、先生を囲む人の輪からはいつも爆笑の渦が巻き起こっていたものです。この度、多くの人々より敬愛され、信頼されていきました富田先生の誠に突然の訃報はまさに青天の霹靂であり、大変驚かされました。

ここに、先生が京都大学において残されました多大な御功績を称え、立派なお人柄をしのびつつ、謹んで先生の御冥福を心からお祈り申し上げます。追悼の詞といたします。

本日ここに京都大学医学部第三内科同門会を代表いたします富田、京都博愛会理事長、病院長、故富田仁先生の御逝去を悼み、謹んで告別の辞を捧げます。

同門会の行事に関して先生からお電話をいただいたのは二月初めでありました。

この度、先生の突然の訃報に接し、愕然とすると同時に、悲しみに堪えません。

先生は昭和二十年京都帝国大学医学部を卒業され、第三内科に入局されました。以来、昭和五十七年京都大学医療技術短期

昭和四十七年より十三年間にわたる日本臨床病理学会副会長をはじめ、日本臨床病理同学院理事、日本アレルギー学会をはじめ六学会の理事など、数多くの学会での役職をお務めになりました。

富田先生が京都大学で活躍されました最後の部署は医療技術短期大学部であり、昭和五十二年に教授として着任されました。この時を先生は教育の時代と呼んでおられます。

富田先生は、臨床検査技師をはじめ、医療従事者の教育には大変御理解が深く、すでに検査部時代から臨床実習などで検査技師教育に携わってこられました。また、昭和三十四年に京都大学医学部に国立大学では最初の衛生検査技師学校が開設された当初、適切な教科書のないことを知り、直ちに検査技師教育の教科書を編集されました。

医療技術短期大学部においては、創設間もない衛生技術学科の教育方針や学科運営を確立されると共に、昭和五十五年四月

より第三代主事（現在の部長）をお務めになりました。主事に就任するや、短期大学部の教育の精神として、医療技術者にとって必須な奉仕・協調・健康の三点を基本理念に定められました。また、その理念を形で表すためにシンボルの木としてユリの木（絆纏木）を選ばれ、そのシンボルの樹に因んで、故阪口健蔵教授が作成されたユリの木の葉をデザイン化したシンボルマークを制定されました。その他、紀要の発刊、広報の発行など、また播磨期の短期大学の教育・研究・管理・運営の確立と拡充に努められました。

その中でも、最も顕著な御功績は、昭和五十七年に理学療法学科と作業療法学科を増設されたことです。先生は両学科設置のために文部省や関係方面との折衝、適切な教官の確保のために、猛暑の中を文字どおり東奔西走されました。そしてその時の過労のために著しく健康を損なわれました。このようにして二十余年に及ぶ短期大学部の歴

史の中で、最大の業績であります。理学・作業療法学科の設立は、ある意味では富田先生の御健康と引き換えで実現したといつても過言ではありません。

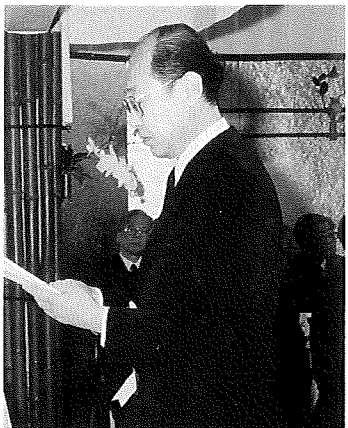
先生は、両学科増設を置き土産の形で、昭和五十七年六月にまだ御定年退官まで二年近くを残されていたが、一身上の御都合により京都大学を去られました。誠に惜しまれてならぬ出来事でした。

先生が医療技術短期大学部の発展に寄与されました御功績は測り知ることができません。昭和六十一年四月に、京都大学医療技術短期大学部に名誉教授制度が制定されましたのを機に、先生に名誉教授の称号をお贈りし、先生の御功績を称えたのであります。

先生は、大変な勉強家で常に御専門の領域ばかりでなく、広く医学の最新情報に精通されており、先生の博識はいつも事の本質を見抜かれる卓越した見識と共に高く評価されていきました。先生の温厚で悠揚迫らず、人



弔 辞



京都大学医学部第三内科教授
同門会代表

篠山重威

大学部教授を御退官になるまで、常に京大で過ごされ、我々後輩のよき指導者でありました。その静かで、おだやかなお人柄でありましたが、時には厳しく、物を学ぶにはその取り組み方の姿勢が重要であることと、自分が成したことへの客観的な評価が必要であることを説かれました。

先生が入局された終戦直後は、大病院でも医師は軍隊に召集されたままで、常勤医師が少ない時代でありました。この為、新入医局員にも夜の当直義務が課せられ、この負担は非常に大きかったということがあります。この時、先生は人の嫌がる仕事

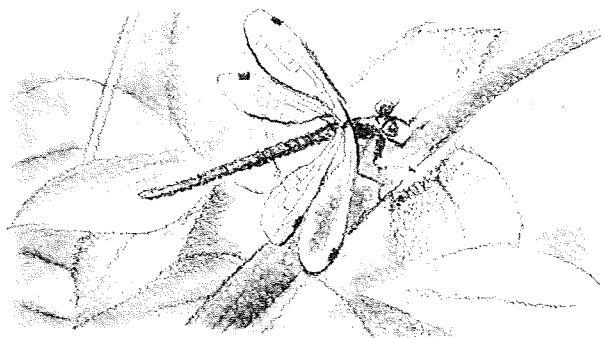
を一手に引き受けて、布団と生活用品を病院内に持ち込み万手当直を始めて、徹夜で仕事をされたと聞いております。このようにして、いつしか先生は周囲の人たちの世話役になっていかれました。

先生の書かれた随筆の中に、「世話役の仕事はやればやる程忙しくなるが、それによって心と身体が健康になった」という一節があります。この言葉は、先生のお人柄を示して余りあるものと思います。

先生には教授御退官後も第三内科同門会会長として色々なお世話をいただきました。教室に關係した全ての人たちをうまくまとめて融和を図り、教室を支えていただきました。

一年前に教室に高性能のファックスを備えて、六百人に及ぶ同門会会員の間に情報網を確立されたのは先生でありました。こんなに早く、このファックスを使って先生の御逝去の報を伝えることになろうとは、思いもよらぬことでありました。

先生から多くのことを教えられたこと、また同門会のために多大の御尽力を賜りましたことに深く感謝申し上げます。同門会も今後力を合わせて発展させていくつもりですから、どうか御安心下さい。ここに先生の御冥福を心からお祈り申し上げ、弔辞といたします。



弔 辞



社団法人 京都私立病院協会 会長

大川原康夫

本日ここに社会福祉法人京都博愛会理事長、故富田仁先生の病院葬に当たり、謹んでご霊前にお別れの言葉を申し上げます。

富田先生の訃報に接し、天命とは申せ、あまりに卒然たるご逝去は、われわれ私立病院関係者にとりまして大きな心の打撃であり、限らない悲しみであります。

先生は昭和五十七年七月から社会福祉法人京都博愛会理事長、京都博愛会病院院長をお務めになられ、昭和六十年以降精神管理棟・本館診療管理棟などを

新築され、近代医療機器の整備に努め、深泥池の自然に恵まれた環境の中で、地域住民の心の休養と総合的健康管理に貢献されたことは、周知の事実であります。

一方、社団法人京都私立病院協会にありましては、昭和五十八年から理事に、平成三年六月から副会長にご就任いただき、実に十三年の間にわたり協会の発展のためにご尽力いただきました。

そして、昭和五十八年六月から協会が運営している京都保健衛生専門学校副校長、平成三年六月から校長としてご就任いただき、今日深刻な看護婦不足

の中で、看護婦・臨床検査技師の養成、育成のために熱心にご活躍いただきました。

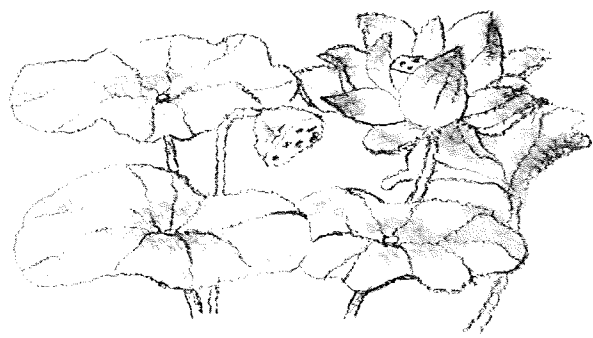
思えば、昭和四十六年九月、堀川高等看護学院の学舎移転にともない、臨床検査技師の養成施設のための学校設立準備委員会が設けられ、部外からの委員としてご尽力いただき、昭和四十八年四月に京都保健衛生学院が開設されました。

先生の温厚篤実なお人柄と卓越した指導力によるご活躍やご功績に対して、我々私立病院関係者、学校関係者は深く感謝申し上げます。

医療情勢厳しい昨今、社会福祉法人京都博愛会にとりましても、我々京都私立病院協会にとりましても、まだまだ先生にご活躍いただきたかったと痛感しております。社会福祉法人京都博愛会も、京都私立病院協会も、先生が築かれた基礎を守り、京都の私立病院の発展のために今後とも、より一層の努力をする所存です。

ここに謹んでご霊前に哀悼の

意を捧げ、生前の数多のご功績に衷心より感謝し敬意を表しまして、お別れの言葉といたします。



弔 辞



京都府医師会長

横田 耕三

謹んで富田仁先生のご霊前に弔辞を捧げます。先生は昭和二十年九月京都帝国大学医学部をご卒業後、母校での研鑽を積み、助手、助教授、教授のご勤務を経て、昭和五十七年七月から社会福祉法人京都博愛会理事長、京都博愛会病院の院長を勤められ、地域の中核病院として地域住民の方々や患者さんの生命と健康を守るため、今日まで十数年の星霜を温厚誠実なお人柄と卓越した指導力をもって、ご活躍されたのであります。

先生のご高名は学内外において夙に高いものがあり、とりわけ京都大学医学部の検査部時代には、医師が早く正確なデータを提出し、そして新しい検査法の開発に常に努力することを使命とされ、検査データの分析に取り組み、臨検検査制度の発展と向上に大いに尽力されたことは多くの方々の知るところでございます。

また臨床診断学、検査診断マニユアルプリンシパル臨床検査等多くの著書を出版し、後進への道しるべを残されると共に日本臨床病理学会認定医として学会活動の発展に大きくご貢献されたのであります。

かように卓越せる学識と温かい徳性をもって広く医学医療の発展と医学教育推進のためご尽瘁になられました。

また先生は、昭和四十三年より私も京都府医師会の学術委員会委員、昭和五十七年十一月から臨床検査精度管理特別委員会の委員長として会員の医学な

ておりましたところ、突然の計報に接し痛恨の思い禁じがたく語るべき言葉もございません。ここに京都府医師会会員とともに、先生のありし日の温容を仰ぎつつ、永年のご功績に心よりの感謝と敬意を捧げ御霊のごしえに安らかならんことをお祈り申し上げお別れの言葉といたします。

一方昭和五十二年四月に京都大学医療技術短期大学教授に就任され、今日深刻な社会問題となつております看護婦不足の中、看護婦を始めとする臨床検査技師、理学療法士、作業療法士などの養成育成のため、先頭に立って活躍されましたことも斯界で大きく評価されているところでございます。

先生には、医師として、医学者として、いよいよ円熟した人間性を見識をもって、今後とも一層のご活躍をご期待申し上げます。



川崎医科大学元学長

柴田 進

弔 辞

富田仁先生

先生よりも年だけよけいにとつていた私が、このように思いがけない儀式の場所で、お別れの言葉をさしあげねばならない運命のいたずらを誠に悲しく淋しく存じます。先生は余りにも足早に私たちの前を立ち去られました。

私が一時的に母校京都大学医学部の病院中央検査部へ山口大学医学部から出向するよう命ぜられたのは昭和四十三年で、日本全国の医科大学に学園騒動の嵐が吹き荒れた、三十年ほど前

のことでした。当時中央検査部を預かっていらつしやつた富田先生と、互いに額をよせてご相談申し上げたものです。

私はそれより以前にアメリカに留学し、人格高潔で真の医学教育者であったUT (University of Tennessee) G.L.W. Diggs 先生から臨床病理学の手ほどきからその運営に至るまで丁寧な教えを受け、先生に傾倒致しており、先生の流儀を宇部で実行していました。従つて富田先生にもこの度渡米なさつて、アメリカのやり方を学びとられるようおすすしめし、医学部長であつた岡本道雄先生に富田先生の留学をお許し下さるようお願い申

しました。それが聞き入れられ、先生はO先生の御推薦のポルトランドのオレゴン大学に留学なさいました。

富田先生は誠実で有能なお人柄でしたから、ここで多くを学びとられました。すなわち後に先生が関西における臨床病理の重鎮として指導力を発揮なさいました。

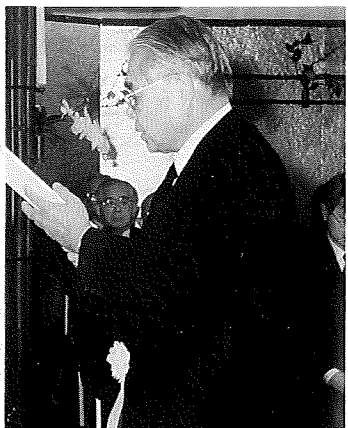
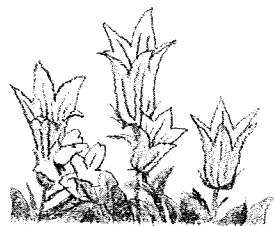
御退官後は先代の残された京都博愛会病院の近代化に取り組み、有料老人ホームの京都ヴィラの開設、博愛会病院の改築、又訪問看護ステーションはくあいをオープンなさいました。この様に、時代の要請をいちはやく見抜いた社会的に広い視野に立つた医療福祉事業を完成なされたのは、先生がポルトランドにいらつしやつて学ばれた事がお役に立ったことと存じます。

先生は、この様に立派なお仕事をなさいましたが、いまやそれを受けついで下さる立派な御家族を残されましたのは有り難いことです。すなわち医師として活躍なさっている御長男御夫

婦や御嬢様があります。

それぞれ各分野で実力を発揮されていますが、例をあげれば哲也先生とその令夫人素子様です。素子様は御主人同様に私共の大学の教育を受けられました。色が、ひきつづき私共の大学の特色であるリハビリテーションの教室で四年間卒業後修練を受け、リハビリの専門家になっていま

す。哲也先生のお役に立っていると存じます。最も大切なことは、お二人の母上すなわち、仁先生の御奥様が健在で、一家をまとめ、ヴィラを運営し、博愛会にも貢献して下さることです。在天の仁先生、先生が残されたお仕事、生き生きと続行されつつあるのを、どうぞ見守つて下さい。



京大二十代会代表

赤堀和一郎

弔 辞

富田先生、ついにお別れせねばならない時がまいりました。

昭和十七年四月京都帝大医学部に入学のとき、席次は隣、北と南の差こそあれ、同じ中国山系の山懐で育つたこともあり、特に親しくおつき合いを頂きました。

実習も常に一緒、解剖実習では夜遅くまで残つて頑張つていた君の姿を思いおこします。寺社参拝などにも一緒にお供しましたね。仏像の時代的考察などの蘊蓄ある意見を聞いたことが、何故か強く記憶に残っています。

講義も常に朝早くから実に真面目に出席されておりました。時にノートを拝借しましたが、君の字は仲々読みづらかった。春、夏休みも、正月休みも殆どなかった学生生活、仮卒業で特別大学院を辞退して陸海軍軍医学校へ、そして敗戦、大学に復帰し研究生活、医局生活は食糧も少なく、電気、ガスも不自由な中を、お互いに苦労しましたね。

君は五代にわたる医家の伝統を受け継ぎ、医の心を真にもちつづけた人でした。常に人の好まぬことも、進んで引き受け、他人の面倒をよくみる人でした。君の誠実、純粹さ、素朴さ、学問に対する真摯な情熱が、私の

心を引きつけたものと思います。娘同志が同年であり、家も近く家族ぐるみのお付き合いでした。富田家に入られた時の披露宴で、もし私が病気になったら、前川教授ではなく、先ず、富田君に診てもらいたいと、先生の面前で挨拶し、皆様の爆笑をかったこともありました。だのに、君の方が先に逝ってしまつた。アレルギー疾患、循環器疾患、肝臓疾患などの研究に、多くの成果を挙げられ、更に看護婦や検査技師等の医療技術者の養成には、最後まで情熱を捧げておられました。

昭和三十一年、正式に同期会を発足しましたが、二十年卒業にちなみ、不撓不屈の精神との主旨でフトウ会と呼称し、毎年全国各地で夫婦共々、最も楽しい年中行事となつて、今に至つております。この間、当初より代表幹事として、面倒な雑務を一手に引き受けて頂きました。他の学年、他校の方々からも羨ましがられるような楽しい結束の強いクラス会に成長しました

のも、一重に君の御盡力の賜物であります。

昨秋は卒業五十周年として、四泊五日の九十数人の参加を得た大二十会を開催し、日本のハイドルベルグ京都の懐かしい思い出にひたり、京都大学に在籍したことよろこびを、しみじみと味わいました。その際総会にて、長年の御盡力に心より御礼を申し上げ、又引き続きお世話をお願いしたばかりであります。

それにしても、毎年作成して頂く会員名簿を、何時もより早く二月初めに御送付いただいたのは、何故であつたのでしょうか。

今後、君のように完璧なことはできませんが、みんなで力をあわせて二十会を維持してゆきたいと思ひます。

どうか奥様には今後共、御参加いただきますよう、お待ちしております。

御子様方も御立派に成人され、既に病院を支えておられます姿を拝見し、君の遺業を見事に継

承されますことを、確信いたします。

思い出はつきませんが、二十

会を代表しまして、感謝の心をこめてお別れの言葉といたします。



富田 仁

正四位に叙する

平成八年二月十七日

内閣総理大臣橋本龍太郎奉



故人略歴等

出生・学歴

大正10年3月12日 鳥取県日野郡日南町に生まれる

昭和17年 富山高専学校理科乙類卒業

昭和20年 京都大学医学部卒業

昭和25年 京都大学医学部大学院特別研修生終了

主な略歴
昭和26年 京都大学医学部助手
(第3内科)

昭和33年 同 助教授
(中央検査部)

昭和45年 米国オレゴン医科大学客員助教授

昭和52年 京都大学医療技術短期大学部教授、主事(部長)

昭和57年 社会福祉法人、京都博愛会理事長・病院長

昭和60年 (株)愛仁苑 京都ヴィラ(有料老人ホーム)会長を兼務

昭和61年 京都大学医療技術短期大学部名誉教授

昭和62年 京都府臨床検査精度管理特別委員会委員長を兼務
平成3年 京都保健衛生専門学校校長を兼務

学会・団体役員
昭和41年 第17回電気泳動学会
昭和44年 第16回日本臨床病理学会総会長

昭和56年 第6回I S Q C学会
長(国際学会)

学会・団体役員
日本臨床病理学会副会長、日本アレルギー学会・日本化学療法学会・日本循環器学会評議員、京都府病院協合理事、京都私立病院協会副会長、京都府医師会学術生涯教育委員会委員

平成八年二月
正四位、
勲三等瑞寶章を授与される

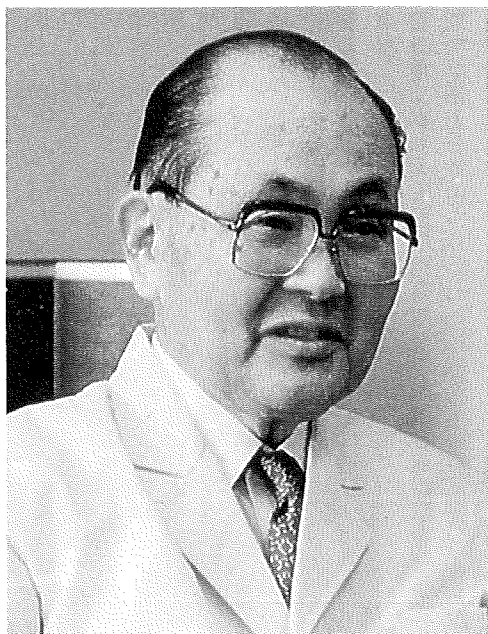
故富田仁院長の 教えを懐う

京都博愛会病院
総婦長

高橋 美津子

すがるような思いで祈りつづけたあの日の午後、知らせを受けた私は、居合せた婦長と共に駆けつけたのですが、何の手もさしのべることが出来ず、茫然と立ちずくんでいるだけでした。あれからずいぶん時間も経過しましたが葬儀のあとしばらくは、出勤退勤には車庫に置かれたままの、白い車体が心なしか淋し気です。特に夕暮れの退勤時には、強く感じました。先生はいつも御自身でハンドルを握られ、だれよりも一番早く出勤しておられました。この事は、私が就職する前から変わらず（私の就職は昭和四十三年）今もあの優しく屈託のない笑顔が目に浮かび『足底の魚の目』の為に購入した九万円の靴の話、東京で買ってこられた塩味のついた半熟の卵の話（とても美味しいのです）なぜ人が判

読出来ないような字を書くようになったか、等々楽しい話題は尽きる事ありません。また院長室の本棚には数多くの書籍が、ぎっしりと並びそれぞれが、先生にとつても大切な宝のようでした。学ぶ事をとて大切にしておられた先生は病院学会への参加や、年に一度開催する事例報告会についても気にかけて下さいました。『いばるな』『おこるな』『ひがむな』は口ぐせのように言われましたが、それは私自身をふり返る言葉として受け止めております。最後まで現役だった先生は、尽きることのない豊富な知識と話題で私達を導いて下さいました。そして人間としてまた、医療を担っている者として最も大切な思いやりの「心」も教えて下さいました。医療をめぐる環境にはきびしいものがありますが、社会のニーズに因應べくたゆまぬ努力を続けていきたいと思えます。先生が生涯にわたり築いてこられた偉大な業績と、豊かな人間性は、いつまでも私達の心の中に生きつづけることでしょう。



なつかしい あの笑顔

涙・涙・涙

富田病院
総婦長

日置 昭子

京都国際会館で日本糖尿病学会が開催されそこに参加してました。その時の事、ポケットベルが鳴りました。「何だろう、お座かな？」と思ひ病院に電話をしましたところ、事務長より「富田先生が大変なんだ」との返事、電話を

直ぐ切り居合わせたタクシーに乗り病院に戻りました。すると、先生は意識はなく懸命に治療が施されていきました。私も白衣に着替え介助に回りましたが、その甲斐もなく、御家族に見守られる中、息を引き取られました。風邪で体調を崩されておられると言う事は何っていましたが、あまりにも突然の事で驚きは隠しきれず涙するばかりでした。先生と接する機会は少なかったのですが、振り返ってみるといろいろなる事を教えて頂いたように思

います。十数年前の事、診療会議の時耳にした事もない「エイズ」について、お話して下さいました。今でも脳裏に焼きついてます。教育熱心な先生は、京都保健衛生専門学校校長もなさっていました。式辞で先生は、「今の日本は物質的には豊かであるが心貧乏が多い。医療に携わる者は、専門職としての知識・技術も必要だけでなく、それ以上に心豊かでないといけない。」と人間教育の必要性をお話されるとともに、医療人として人間性豊かになって欲しいと強調されていました。

看護の原点は「愛」とか「心」とか言われますが、看護の原則は変わっても、看護の本質は今も昔も変わらないと思っています。先生の教えを心して自己啓発に努めフレキシブルに対応できるよう頑張っていくと思っています。

今でも先生の事を不図思い出すと涙が込み上げてきます。先生いろいろありがとうございます。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

理事長紹介



社会福祉法人
京都博愛会
理事長 天野 博道

昭和四年一月鳥取県米子市生まれ。A B型。二十八年東京大学経済学部卒業。三菱重工業(株)に三十二年勤務し総務部長、企画管理部長等を歴任。その間同社横浜造船所の工場移転とその跡地の「みなとみらい21」へ再開発の立役者の一人として活躍。同社の関連会社役員を経て平成二年六月本会の理事に就任。企業経営全般に詳しく、前理事長の補佐役として活躍されていたが、当面は本会を明るくい展望をもつ安定経営の軌道に乗せることが責務とされている。

趣味はゴルフ、クラシック音楽観賞、旅行などが最近は限りなくゼロに近い由。横浜在住で目下単身赴任的な状況。前理事長御令室(京都ヴィラ苑長)の実弟で、ご家族は奥様と一男一女。

病院長紹介



京都博愛会病院
院長 黒河内 剛

昭和十一年五月東京生まれの会津若松出身。A B型。三十七年京都府立医大卒業。堀川病院健康管理部長から長岡京市国民健康保険診療所長を経て五十八年本院副院長赴任平成八年病院長に就任。

専門は内科一般、特に糖尿病及び社会医療を研究。「老年医学」の追求や「包括医療の展開」を抱負とされ、特に今後益々増加するお年寄りに照準を当て、毎日遅くまで献身的に診療されています。患者数も多く受け持たれ多忙の中で、地域医療にも貢献大です。このように先生は毎日が多忙で、仕事一筋の真面目なお人柄です。趣味は「読書、園芸」など。ご家族は奥さんと一男一女。ですが、現在は御夫妻と猫一匹の同居暮らしとの事です。

病院長紹介



富田病院
院長 山本 仁

昭和十七年五月満州大連市生まれで、大阪育ち。B型。昭和四十二年京都大学医学部卒業。京大病院から米国に留学、帰国後の昭和五十四年より国立循環器病センター室長。

平成元年七月富田病院に赴任し、内科部長、副院長を経て、平成八年五月院長に就任。専門は内科、特に循環器病学。医療情勢の厳しい時に院長に就任され、診療、院長業務と多忙な毎日をお過しです。先生の座右銘の「誠心誠意」の言葉通り、休む間もおしんで勤務される献身的なお姿と、几帳面で誠実なお人柄は患者さんの敬愛の的です。趣味は「美術鑑賞と読書」など。奥様、二女の明るいご家庭です。